

羅生門

芥川竜之介小説集

【芥川竜之介 ● 著】



日本名作シリーズ003

・ 日本語版 ・

上海三聯書店





郑州大学 *04010776615.*

H369.4:I
J743

羅生門

芥川竜之介小説集

【芥川竜之介 ● 著】



日本名作シリーズ003

・ 日本語版 ・



H369.4:I

J743

目 録

ひよつとこ	1
羅生門	10
鼻	18
父	27
猿	34
煙草と悪魔	42
或日の大石内蔵助	52
戯作三昧	65
地獄変	101

毛利先生

蜜柑

沼地

葱

お律と子等と

藪の中

白

蜃気楼

河童

或阿呆の一生

ひよつとこ

吾妻橋の欄干によつて、人が大ぜい立っている。時々巡査が来て小言をいうが、すぐまた元のように人山が出来てしまふ。皆、この橋の下を通る花見の船を見に、立っているのである。

船は川下から、一、二艘ずつ、引き潮の川を上つて来る。大抵は伝馬に帆木綿の天井を張つて、そのまわりに紅白のだんだらの幕をさげている。そして、舳には、旗を立てたり古風な幟を立てたりしている。中にいる人間は、皆酔っているらしい。幕の間から、お揃いの手拭を、吉原かぶりにしたり、米屋かぶりにしたりした人たちが「一本、二本」と拳をうつっているのが見える。首をふりながら、苦しうに何か唄っているのが見える。それが橋の上にいる人間から見ると、滑稽としか思われない。お囃子をのせたり楽隊をのせたりした船が、橋の下を通ると、橋の上では「わあつ」という晒い声が起る。中には「莫迦」という声も聞える。

橋の上から見ると、川は亜鉛板のように、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸気がその上に眩しい横波の鍍金をかけている。そうして、その滑な水面を、陽気な太鼓の音、笛の音、三味線の音が風のようにむず痒く刺している。札幌ビールの煉瓦壁のつきる所から、土手の上をずすと向うまで、煤けた、うす白いものが、重そうにつづいているのは、丁度、今が盛りの桜である。言問の栈橋には、和船やボートが沢山ついているらしい。

それがここから見ると、丁度大学の艇庫に日を遮られて、ただごみごみした黒い一色になって動いている。

すると、そこへ橋をくぐって、また船が一艘出て来た。やはりさつきから何艘も通ったような、お花見の伝馬である。紅白の幕に同じ紅白の吹流しを立てて、赤く桜を染めぬいたお揃いの手拭で、鉢巻をした船頭が二人、三人櫓と棹とで、代る代る漕いでいる。それでも船足は余り早くない。幕のかげから見える頭数は五十人もいるかと思われる。橋をくぐる前までは、二艇三味線で、「梅にも春」か何かを弾いていたが、それがすむと、急に、ちゃんぎりを入れた馬鹿囃子が始まった。橋の上の見物がまた「わあつ」と晒し声を上げる。中には人ごみに押された子供の泣き声も聞える。「あらごらんよ、踊っているからさ」という甲走った女の声も聞える——船の上では、ひよつとこの面をかぶった背の低い男が、吹流しの下で、馬鹿踊を踊っているのである。

ひよつとは、秩父銘仙の両肌をぬいで、友禅の胴へむき身絞りの袖をつけた、派手な襦袢を出している。黒八の襟がだらしなくてはだけて、紺献上の帯がほどけたなり、だらりと後へぶら下がっているのを見ても、余程、酔っているらしい。踊は勿論、出たらめである。ただ、いい加減に、お神楽堂の上の莫迦のような身ぶりだとか、手つきだとかを、繰返しているのにすぎない。それも酒で体が利かないと見えて、時々はただ、中心を失って舷から落ちるのを防ぐために、手足を動かしているとしたか、思われない事がある。

それがまた、一層可笑しいので、橋の上では、わいわいいつて、騒いでいる。そうして、皆、晒しながら、さまざまな批評を交換している。「どうだい、あの腰つきは」「いい気なもんだぜ、どこの馬の骨だろう」「おかしいねえ、あらよろけたよ」「一そ素面で踊りやいいのにさ」——ざつとこんな調子である。

その内に、酔が利いて来たのか、ひよつとこの足取がだんだん怪しくなつて来た。丁度、不規則な Metronome

のように、お花見の手拭で頬かぶりをした頭が、何度も船の外へのめりそうになるのである。船頭も心配だと見えて、二度ばかり後から何か声をかけたが、それさえまるで耳にはいらなかったらしい。

すると、今し方通った川蒸汽の横波が、斜に川面をすべつて来て、大きく伝馬の底を揺り上げた。その拍子にひよつとこの小柄な体は、どんとそのあおりを食つたように、ひよろひよろ前の方へ三足ばかりよろけて行つたが、それがやつと踏止つたと思うと、今度はいきなり廻転を止められた独樂のように、ぐるりと一つ大きな円をかきながら、あつという間に、メリヤスの股引をはいた足を空へあげて、仰向けに伝馬の中へ転げ落ちた。

橋の上の見物は、またどつと声をあげて晒つた。

船の中ではそのはずみに、三味線の棹でも折られたらしい。幕の間から見ると、面白そうに酔つて騒いでいた連中が、慌てて立ったり坐つたりしている。今まではやっていた馬鹿囃子も、息のつまつたように、ぴったり止んでしまった。そうして、ただ、がやがやいう人の声ばかりする。何しろ思いもよらない混雑が起つたのにちがいない。それから少時すると、赤い顔をした男が、幕の中から首を出して、さも狼狽したように手を動かしながら、早口で何か船頭にいつけた。すると、伝馬はどうしたのか、急に取舵をとつて、舳を桜とは反対な山の宿の河岸に向けはじめた。

橋の上の見物が、ひよつとこの頓死した噂を聞いたのはそれから十分の後である。もう少し詳しい事は、翌日の新聞の十把一束という欄にのせてある。それによると、ひよつとこの名は山村平吉、病名は脳溢血という事であつた。

山村平吉はおやじの代から、日本橋の若松町にいる絵具屋である。死んだのは四十五で、後には瘦せた、雀斑のあるお上みさんと、兵隊に行っている息子とが残っている。暮しは裕だというほどではないが、雇人の二、三人も使つて、どうにか人並にはやつていらしい。人の噂では、日清戦争頃に、秋田あたりの岩緑青を買占めにかかったのが、当たつたので、それまでは老舗というだけで、お得意の数も指を折るほどしか無かつたのだという。

平吉は、円顔の、頭の少し禿げた、眼尻に小皺のよつてゐる、どこかひょうきんな所のある男で、誰にでも腰が低い。道楽は飲む一方で、酒の上はどちらかというと、まずいい方である。ただ、酔うと、必ず、馬鹿踊をする癖があるが、これは当人にいわせると、昔、浜町の豊田の女将が、巫女舞を習つた時分に稽古をしたので、その頃は、新橋でも芳町でも、お神楽が大流行だつたという事である。しかし、踊は勿論、当人が味噌を上げるほどのものではない。悪くいえば、出たらめで、善くいえば喜撰でも踊られるより、嫌味がないというだけである。もつともこれは、当人も心得ていると見えて、しらふの時には、お神楽のおの字も口へ出した事はない。「山村さん、何かお出しなさいな」などと、すすめられても、冗談に紛らせて逃げてしまう。それでいて、少しお神酒がまわると、すぐに手拭をかぶつて、口で笛と太鼓の調子を一つにとりながら、腰を据えて、肩を揺つて、塩吹面舞と言ふのをやりたがる。そうして、一度踊り出したら、いつまでも図にのつて、踊っている。はたで三味線を弾いていようが、謡をうたつていようが、そんな事にはかまわない。

ところが、その酒が崇つて、卒中のように倒れたなり、気の遠くなつてしまった事が、二度ばかりある。一度は町内の洗湯で、上り湯を使いながら、セメントの流しの上へ倒れた。その時は腰を打つただけで、十分とたた

ない内に気がついたが、一度目に自家の蔵の中で仆れた時には、医者を呼んで、やつと正氣にかえして貰うまで、かれこれ三十分ばかりも手間どった。平吉はその度に、医者から酒を禁じられるが、殊勝らしく、赤い顔をせずにいるのはほんのその当座だけで、いつでも「一合位は」からだんだん枰数がふえて、半月とたたない中に、いつの間にかまた元の空阿弥になってしまふ。それでも、当人は平氣なもので「やはり飲まずにいますと、かえつて体にいけませんようで」などと勝手な事をいつてすましている。

しかし平吉が酒をのむのは、当人のいうように生理的に必要があるばかりではない。心理的にも、飲まずにはいられないのである。何故かという、酒さえのめば氣が大きくなって、何となく誰の前でも遠慮が入らないような心持ちになる。踊りたければ踊る。眠たければ眠る。誰もそれを咎める者はない。平吉には、何よりもこれが難有いのである。何故これが難有いか。それは自分にもわからない。

平吉はただ酔うと、自分がまったく、別人になるという事を知っている。勿論、馬鹿踊を踊ったあとで、しらふになってから、「昨夜は御盛んでしたな」といわれると、すっかりれてしまつて、「どうも酔はらうとだらしはありませんでね。何をどうしたんだか、今朝になつてみると、まるで夢のような始末で」と月並な嘘をいつているが、実は踊つたのも、眠てしまつたのも、いまだにちゃんと覚えていて。そうして、その記憶に残っている自分と今日の自分と比較すると、どうしても同じ人間だとは思われない。それなら、どっちの平吉がほんとうの平吉かというと、これも彼には、判然とわからない。酔っているのは一時で、しらふでいるのは始終である。

そうすると、しらふでいる時の平吉の方が、ほんとうの平吉のように思われるが、彼自身では妙にどっちともいい兼ねる。何故かという、平吉が後で考えて、莫迦莫迦しいと思う事は、大抵酔った時にした事ばかりである。馬鹿踊はまだ好い。花を引く。女を買う。どうかすると、ここに書けもされないような事をする。そういう事をする自分が、正気の自分だとは思われない。

Janus のいう神様には、首が二つある。どっちがほんとうの首だか知っている者は誰もいない。平吉もその通りである。

ふだんの平吉と酔っている時の平吉とはちがうといった。そのふだんの平吉ほど、嘘をつく人間は少いかもしれない。これは平吉が自分で時々、そう思うのである。しかし、こういつたからといって、何も平吉が損得の勘定ずくで嘘をついているという訳では毛頭ない。第一彼は、ほとんど、嘘をついているという事を意識せずに、嘘をついている。もつともついでしようとすぐ、自分でもそうと気がつくが、現についている時には、全然結果の予想などをする余裕は、無いのである。

平吉は自分ながら、何故そう嘘が出るのかわからない。が人と話していると自然にいおうとも思わない嘘が出てしまう、しかし、格別それが苦になる訣でもない。悪い事をしたという気がする訳でもない。そこで平吉は、毎日平気で嘘をついている。

平吉の口から出た話によると、彼は十一の年に南伝馬町の紙屋へ奉公に行った。するとその旦那は大の法華

気違いで、三度の飯も御題目を唱えない内は、箸をとらないといった調子である。ところが、平吉がお目見得をしてから二月ばかりするとそこのお上さんがふとした出来心から店の若い者と一しよになつて着のみのままでかけ落ちをしてしまった。そこで、一家安穩のためにした信心が一向役にたたないと思つたせいか、法華氣違ひだつた旦那が急に、門徒へ宗旨替をして、帝釈様のお掛地を川へ流すやら、七面様の御影を釜の下へ入れて焼くやら、大騒ぎをした事があるそうである。

それからまた、そこに廿までいる間に店の勘定をごまかして、遊びに行つた事が度々あるが、その頃、馴染みになつた女に、心中をしてくれといわれて弱つた覚もある。とうとう一寸逃れをいって、その場は納まつたが、後で聞くとやはりその女は、それから三日ばかりして、鋳屋の職人と心中をしていた。深間になつていた男がほかの女に見かえたので、面当てに誰とでも死にたがつていたのである。

それから廿の年におやじがなくなつたので、紙屋を暇をとつて自家へ歸つて来た。半月ばかりするとある日、おやじの代から使つていた番頭が、若旦那に手紙を一本書いて頂きたいという。五十を越した実直な男で、その時右の手の指を痛めて、筆を持つ事が出来なかつたのである。「万事都合よく運んだからその中にゆく。」と書いてくれというので、その通り書いてやつた。宛名が女なので、「隅へは置けないぜ」とか何とかいつて冷評したら、「これは手前の姉でございます」と答えた。すると三日ばかりたつ内に、その番頭がお得意先を廻りにゆくといつて家を出たなり、いつまでたつても帰らない。帳面を調べてみると、大穴があいている。手紙はやはり、馴染の女の所へやつたのである。書かせられた平吉ほど莫迦をみたものはない。……

これが皆、嘘である。平吉の一生（人の知っている）から、これらの嘘を除いたら、あとには何も残らないの

に相違ない。

平吉が町内のお花見の船の中で、お囃子はやしの連中にひよつとこの面を借りて、舷ぶらばたへ上ったのも、やはりいつもの一杯機嫌でやったのである。

それから踊っている内に、船の中へころげ落ちて、死んだ事は、前に書いてある。船の中の連中は、皆、驚いた。一番、驚いたのは、あたまの上へ落ちられた清元のお師匠さんである。平吉の体はお師匠さんのあたまの上から、海苔のりまき卷や、うで玉子の出ている胴の間の赤毛布あかざつぷの上へ転げ落ちた。

「冗談じゃあねえや。怪我けがでもしたらどうするんだ。」これはまだ、平吉が巫山戯ふざけていると思った町内の頭が、中つ腹でいったのである。けれども、平吉は動くけしきがない。

すると頭の隣かたわらにいた髪結床かみゆいどこの親方が、さすがにおかしいと思つたか、平吉の肩へ手をかけて、「旦那、旦那……もし……旦那……旦那……」と呼んで見たが、やはり何とも返事がない。手のさきを握っていると冷くなっている。親方は頭と二人で平吉を抱き起した。一同の顔は不安らしく、平吉の上にさしのべられた。「旦那……旦那……もし……旦那……旦那……」髪結床の親方の声が上がって来た。

するとその時、呼吸とも声ともわからないほど、かすかな声が、面めんの下から親方の耳へ伝つて来た。「面を……面をとつてくれ……面を。」頭と親方とはふるえる手で、手拭と面を外した。

しかし面の下にあつた平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなつていた。小鼻が落ちて、唇の色が變つ

て、白くなった額には、油汗が流れている。一眼見たのでは、誰でもこれが、あの愛嬌のある、ひょうきんな、話のうまい、平吉だと思ふものはない。ただ変らないのは、つんと口をとがらしながら、とぼけた顔を胴の間の^{あかザツト}赤毛布の上に仰向けて、静に平吉の顔を見上げている、さっきのひよつとこの面ばかりである。

大正三年（一九一四）十二月

羅生門

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗^{にぬり}の剥げた、大きな円柱^{まるばしら}に、蟋蟀^{せりぎりす}が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路^{すざくおほみち}にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もみえびし}が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

何故かという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉^{うきざい}とかいう災^{わざ}がつづいて起った。そこで洛中^{らくちゅう}のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎^{なぐ}いて、その丹^にがついたり、金銀の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}はたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料に売っていたという事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸^{こり}が棲^すむ。盗人^{ぬすびと}が棲^すむ。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くという習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまったのである。

その代りまた鴉^{からす}がどこからか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾^{しび}

のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉いばは、勿論、門の上にある死人の肉を、啄つみに来るのである。——もつとも今日は、刻限きげんが遅いせいにか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺あざの襖あはの尻しりを据えて、右の頬に出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微さいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」という方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。申まをの刻下こくまりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日あすの暮しをどうにかしようとして——いわばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍いらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる違ちがはない。選んでいれば、築土ついでの下か、道

ばたの土の上で、餓死うんじをするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊ていかいした揚句あげくに、やつとこの局所きょじょへ逢着ほうちやくした。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人なすびとになるよりほかに仕方がない」という事を、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くしゃみをして、それから、大儀たいぎそうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまつていた蟋蟀せりぎりすも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗疹かざみに重ねた、紺あがの襖あがの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれのない、人目にかかる惧おそのない、一晚楽いちばんがくにねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄ひじりつかの太刀が鞘走さやばしらないように氣をつけながら、葦草履わらそうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺うかがつていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚ひげの中に、赤く膿うみを持った面炮めんびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高たかを括くくつていた。それが、梯子を二、三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を

そこそこ動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているから、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくらがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を